

AET2

Asian and Middle Eastern Studies Tripos, Part II

Friday 9 June 2017 9 to 12.00 pm

Paper J12

Modern Japanese texts 3

*Candidates should answer **one** question from section A and **two** questions from section B.*

*Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** answer booklet.*

STATIONERY REQUIREMENTS

20 page answer booklet

Rough Work Pad

SPECIAL REQUIREMENTS TO BE SUPPLIED FOR THIS EXAMINATION

Shinjigen dictionary

Kojien dictionary

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed to do so.

SECTION A

Translate **ONE** of the following passages taken from **unseen** texts into **English**: [40 marks]

(1)

人間のなかにストレスが溜まると同様に、社会にもストレスが溜まります。政治家の失政と腐敗、高級官僚の犯罪、政官財の癒着、警官や裁判官のスキャンダル、凶悪犯罪の横行、幼児の虐待、不景気で倒産、経営者の無責任、リストラ、賃金カット、失業など、私たちを取り巻く社会的状況は、私たちに無念と失望、不安と腹立ちを与え、国民の元気を殺いでしまっています。マスメディアは、それらを大きく、時にはセンセーショナルに取り上げますが、それらのニュースが氾濫すればするほど、私たちの気持ちは暗くなるばかりで、晴れることはありません。気持ちは晴れず落ち込んでも、また事態がどのように悪化しても、私たちは明日を元気に生きなければなりませんし、また生きたいと願っています。

そんなとき、「諷刺の笑い」が私たちを笑わせてくれます。諷刺の矢を放つことで、相手に反省を強いて、社会の「毒素」が多少とも浄化されれば、つまり事態を変えることになれば、大変けっこうなことですが、先ずそんなことにはなりそうにありません。事態を変えることにならないとしても、私たちは笑う必要があります。笑って多少とも、社会的ストレスを発散させ、元気でありたいと思います。

人との挨拶のなかでも、「暗いニュースばかりで」とか「景気はさっぱりよくなりませんな」、「これから一体どうなるんですかね」といった挨拶ばかり交わしているようでは、やはり元気ができません。気分を晴らすために笑う必要があります。笑って景気が回復してくれば、言うことなしですが、しかし、笑うこともなかったら、ますます滅入ってしまい、暗闇からの脱出は難

Question (1) continued...

しくなります。周囲の状況がいくらひどくなっても、それでもそのなかで笑うことが大切だと思います。

諷刺は、敵Ⅱ毒に向けての矢に相当します。したがって、矢を射られた人は、怒るに違いありません。諷刺が民衆を笑わせ拍手喝采を浴びるなら、諷刺の笑いは相手に届くでしょう。権力者によっては、民衆からの笑いが許せず、諷刺家に圧力をかける場合も出てきます。したがって、諷刺家は、諷刺の表現に当たって、さまざまな技法を凝らします。架空の国を作ったり、動物に託したり、フィクションの世界を借りたり、知的な工夫をして諷刺の目的を遂げようとしています。

どんな表現形態をとるにせよ、スタンスは相手への攻撃であり、攻撃の武器として笑いを使っているところにあります。狙いは、諷刺の対象を笑うことで、矛盾を暴き、その対象の権威を相対化し、権威をおとしめることにあります。

諷刺の笑いには、硬直した制度や政策にショックを与え、既存の体制を揺さぶって、新たな考え方や視点を留意するという効用があります。つまり、既存の体制を相対化することが、囚われていた枠組みからの解放をもたらしてくれるということになります。

諷刺の笑いは、私たちの鬱積していた感情を呼び覚まし、無関心の意識を揺さぶって活性化してくれます。眠っている関心を呼び覚ましてくれます。真面目な固い議論ばかりでは、そういう風にはなりにくいのです。

INOUE HIROSHI, *Osaka no bunka to warai* (2003), pp. 155-7.

(TURN OVER)

(2)

大日本帝国は単一民族の国家でもなく、民族主義の国でもない。否、日本はその建国以来単純な民族主義の国ではない。われわれの遠い祖先が或はツングウスであり、蒙古人であり、インドネシヤ人であり、ネグリイトであることも学者の等しく承認してゐるところであるし……帰化人のいかに多かつたかを知ることができるし、日本は諸民族をその内部にとりいれ、相互に混血し、融合し、かくして学者の所謂現代日本民族が生成されたのである。

日本民族はもと単一民族として成立したのではない。上代においてはゆる先住民族や大陸方面からの帰化人がこれに混融同化し、皇化の下に同一民族たる強い信念を培はれて形成せられたものである。

この二つの文章は、いずれも太平洋戦争中の一九四二年に発表されたものである。前者は総合雑誌の巻頭時評で、後者は文部省社会教育局が発行した本の一部だった。¹⁾

一九七〇年代後半から、多くの論者が以下のように論じてきた。「明治いらいの日本人は、自分た

Question (2) continued...

ちが純粹な血統をもつ単一民族であるという、単一民族神話に支配されてきた。それが、戦争と植民地支配、アジア諸民族への差別、そして現在のマイノリティ差別や外国人労働者排斥の根源である」と。だがそうだとすれば、上記のような文章の存在はどのように位置づけられるのだろうか。

問いの設定

ここでわれわれは、まず二つの事実を確認しなければならない。一つは、戦前の大日本帝国は、多民族帝国であったということである。

こんにちでは忘れられがちなことだが、一八九五年に台湾を、一九一〇年に朝鮮を併合していらい、総人口の三割におよぶ非日系人が臣民としてこの帝国に包含されていた。戦時中の「進め一億火の玉」という名高いスローガンにうたわれた「一億」とは、朝鮮や台湾を含めた帝国の総人口であり、当時のいわゆる内地人口は七千万ほどにすぎない。第9章で述べるが、国定教科書においても、大和民族以外の人びとが帝国人口の三割を占めていることは明記されていた。もちろんそれは、諸民族が平等に共存している国家ではなかったが、そうであっても、事実として単一民族国家ではなかったのである。

ここで、疑問が発生せざるをえない。朝鮮や台湾を喪失し、非日系人が一気に少数となった戦後の日本で単一民族神話が通用したとしても、多民族帝国であった戦前において、単一民族という意識が成立しえたのだろうか？

OGUMA EIJI, *Tan'itsu minzoku shinwa kigen* (1995), pp. 3-4.

Page 5 of 12

(TURN OVER)

SECTION B

Translate **TWO** of the following passages taken from **seen** texts into **English**: [each translation is worth 30 marks]

(3)

日独防共協定を容認

誰かにつけられている。

朝日新聞ベルリン通信局長、浜田常二良つねじが感付いたのは、ベルリン五輪ごりんが終わって1カ月余がすぎた1936（昭和11）年9月だった。

五輪期間中、浜田は、日独間で防共協定を締結する話が進んでいることをつかんだ。共産主義の脅威に対抗するため両国が協力するという内容だ。

浜田は東京と大阪の朝日新聞の責任者に手紙で概略を知らせ、記事にする方式と時期はそちらで研究してほしい、と伝えた。

朝日新聞は外務省と陸軍の参謀本部に事実確認を求めた。どちらも「絶対はない」と否定した。ドイツの日本大使館が浜田の行動を調べるようドイツ当局に求めた。秘密警察が動いた。

浜田は恐怖にかられた。ナチスが政権をとって以来、外国人記者4人が行方不明になっていた（浜田『大戦前夜の外交秘話』）。

同じ36年秋、駐英大使の吉田茂（戦後、首相）は、防共協定について政府から同意を求められた。しかし、吉田は、枢軸側（独伊）が戦争を起こした場合、日本は英米と戦う羽目に陥るとの理由で反対した（原彬久『吉田茂』）。

吉田のように日本外交の基調を英米との協調におくか、それとも英米と対抗するか。ドイツと結ぶことは、後者への傾斜を意味した。

内務省は防共協定に関する報道を禁じ、賛否の議論を封じた。浜田の特ダネも結局、日の目を見なかった。報道が解禁されたのは、ベルリンでの調印当日の11月25日だった。

朝日新聞は翌26日付社説で「日独協定は何ら排他的意義を有するものではない」と述べて、政府の見解に歩調を合わせた。各紙の論説は「殆んど大同小異」だった（出版警察資料第20号）。読売新聞だけは、ドイツが外交上も財政上も極度の窮乏に陥っているときに「殊更に協定する必要」があったのかと批判的だった。当時の南満州鉄道総裁で、のちに外相を務める松岡洋右は、このころ講演で語っている。

「我が大和民族は、人と提携し若くば同盟した時……はつきりと心中までいくといふ決心で、抱きあつて進む」「日独が固く提携して邁進するなら、必ずやその内英国始め追々分つて来ると信じます」（三輪公忠『松岡洋右』）

37年7月、日中戦争が始まった。11月にはイタリアが防共協定に参加した。

翌年2月、ヒトラーが「満州国」承認を表明すると、朝日新聞は2月22日付社説で「ドイツ総統の英断」に対し「満腔の敬意」を表した。

ASAHI SHIMBUN COMPANY, *Shimbu to Shōwa* (2010), pp. 132-3.

「神谷さんの説明は漫才師を語っていることにならないんですか？」

僕は少し前から疑問に思っていたことを口にした。この人になら聞いてもいいと思ったのだ。

しかし、「その発言が、もし揚げ足を取ろうとして言ったのであれば師匠として、どつき回したろうと思うんやけど」と言われたので、本当に知りたいのだと伝えた。神谷さんは腕組みをして、一度大きく頷いた。

「漫才師とはこうあるべきやと語ることで、漫才師を語ることとは、全然違うねん。俺がしてるのは漫才師の話やねん」

「はい」

「準備したものを定刻に来て発表する人間も偉いけど、自分が漫才師であることに気づかずに生まれてきて大人しく良質な野菜を売っている人間がいて、これがまず本物のボケやねん。ほんで、それに全部気づいている人間が一人で舞台上がって、僕の相方ね自分が漫才師やいうこと忘れて生まれて来ましてね、阿呆やからいまだに気づかんと野菜売ってまんねん。なに野菜売つとんねん。っていうのが本物のツッコミやねん」

神谷さんは言い終わると同時に焼酎を一気に呷り、グラスを空中に掲げると十、九、八、七、六と数え始めた。神谷さんが、一を、「イーチ」と伸ばして言っている間に、店員が焼酎を持ってきて、神谷さんと僕の前に一杯ずつ置いた。僕の眼の前には二杯のグラスが並んだので、グラスに口をつけると、神谷さんが「慌てんと呑みや」と微笑んだ。眼の前人間が土地の神ではないにしろ、妖怪の類に見えてきた。

(4)

「でもあれやな」

そう言ったあと、神谷さんはしばらく黙りこんだ。いつの間にか僕達の他には客がいな

かった。代わりに奥の小上がりに地元の人間が集まり始めていた。

「そんな、ほんまにやっても誰も笑わへんから、それくらいの本当の気持ちで、子供も大人も神様も笑わさなあかんねん。歌舞伎とかもそうやんな」

歌舞伎や能の起源は神に捧げられる行事であったと聞いたことがある。確かに誰にも届かない小さな声で、聞く耳を持つ者すらいない時、僕は誰に対して漫才をするのだろうか。現代の芸能は一体誰のために披露されるものなのだろう。

「伝記って、その人が死んでから出版するんですよね？」

「お前、俺より長生き出来ると思うなよ」と神谷さんは鋭い眼で僕を睨んだ。

どのようなテンションで、この言葉を発しているのだろうか。

「生前に前編を出版して、死後に中編を出版やな」と一変して今度は楽しそうに言う。

「後編気になって、文句出ますよ」

「そんならいの方が、面白いやんけ」

神谷さんは伝票を持つと席を立った。

帰り際に、「握力が強過ぎるゴリラ同士の握手みたいやったな」と言われた。僕は先輩と呑む初めての経験に緊張していたのだが、神谷さんも同じだったのかもしれない。

「ごちそうさまでした」と僕が言うと、神谷さんは「全然、全然」と眼を合わさず恥ずかしそうにして、「俺、こっちやから、またな」と言い残し、どこかに走って行った。

「お前の言葉で、今日見たことが生きてるうちに書けよ」という神谷さんの言葉を思い出すと、胸の辺りに温もりが満ちて行く感覚があった。書くことが楽しみなのだろうか。情熱を預ける対象が見つかったことが嬉しいのだろうか。宿に帰る途中でコンビニに寄り、いつもより少し高いボールペンとノートを買った。涼しい風の吹く海沿いの道を歩きながら、どこから書き始めるかを考えていた。見物客は宿に収まりきったのか、人影はまばらで波音が静かに聞こえていた。耳を澄ますと花火のような耳鳴りがして、次の電柱まで少しだけ走った。

MATAYOSHI NAOKI, *Hibana* (2015), pp. 16-19.

(TURN OVER)

新聞大会を利用

1943（昭和18）年に東京で開かれた大東亜会議は、11月5、6日の2日間で終わったが、開催地の東京では関連行事が続いた。17日開幕の大東亜新聞大会にはアジアの新聞の主筆や編集長らが参加。大東亜会議の6カ国のほかに、香港、ジャワ、スマトラ、ボルネオなど7地域が加わった。

主催したのは日本新聞会。新聞界の自主的機関だった日本新聞連盟を改組した、官製の統制団体で、政府の強い影響下にあった。

朝日は11月16日付の前触れ記事で「活発な思想戦展開へ」とうたった。だが内実は、大東亜宣言の宣伝と戦争協力の確認の一色だった。

大東亜会議で日本政府は「大東亜に於ける帝国の指導性を直接印象付けるが如き書振りを為さざること」（菊号宣伝要綱（案））と、前面に出るのを抑えたが、新聞大会では参加者の演説を通じ「盟主日本」があらさまになった。

マライ代表「マライ青年の唯一の希望は自ら戦線に立つて、大東亜より米英の勢力を一掃するに挺身したい」

スマトラ代表「残存する米英蘭の影響を払拭し、新生アジアの中核日本の勝利に対する信頼を強化する」
セラム（現インドネシア東部）代表「大日本政府に対し、忠誠の精神を涵養する」

日本礼賛ぶりは、痛々しいほどだ。

ボルネオ代表は「私ども現地新聞人は大日本が尊い身命を犠牲にして解放した原住民を大東亜共栄圏の建

(5)



設に対し、自覚するまで指導せねばならない」と演説。帰国後、日本見聞記を現地の新聞に載せ、東京の都市機能をたたえた。

日本側にとって大会は宣伝の場だった。開幕前日、参加者一行を皇居に案内して「宮城奉拝」をしたあと、靖国神社と明治神宮を参拝。大会最終日には「天皇陛下万歳」を叫んだ。

閉幕後10日間にわたり日本各地を案内した。陸軍士官学校（神奈川県・座間）、海軍航空隊（茨城・土浦）、三菱重工業（名古屋）、伊勢神宮、陸軍飛行学校（三重・明野）、奈良、京都を経て、大阪で散会した。日本の戦力、生産力が健在だとアピールする意図が見える。

日本政府は、この新聞大会を含めて、大東亜会議の宣伝に躍起だったが、関係国以外からはほとんど反応がなかった。

大東亜省がまとめた海外の反響によると、蒋介石政権の拠点の重慶放送は「日本は勝利の自信を失いて唯、傀儡会議かいらいを利用してその滅亡を免れんとし居るも、これは不可能にして……」と短く論評。ニューヨーク発AP電は、開催の事実と顔ぶれを伝えただけだったという。

ASAHI SHINBUN COMPANY, *Shinbun to Shôwa* (2010). Pp. 155-6.

END OF PAPER

Page 12 of 12